修道学園(中・高)同窓会会報誌

修道

創刊号

平成24年9月29日発行

information

- 髙木会長ごあいさつ …… 1
- 支部総会報告
  - 広島修道歯科医会 …… 2
  - 江能修友会 …… 2
  - 関東支部 …… 2
  - 修道医会 …… 3
  - 九修会 …… 3
- 班OB会報告
  - 硬式テニス班 …… 3
- 同期会報告
  - 高４回　河野富士雄 …… 3
  - 高９回　横田　　守 …… 4
  - 高12回　増本　光雄 …… 4
  - 高13回　益永　茂治 …… 4
- 近況報告　4
  - 一期一会のいつか「回顧録」森山 純爾 … 5
  - 『藤田正明先輩と語る会』17回忌を終えて … 6
- 山縣亮太選手ロンドンオリンピック出場壮行会
  - 中村靖富満(高30回) …… 7
- 第30回 オリンピック競技大会
  - ご報告と御礼　山縣亮太 …… 8
- 事務局だより
  - 訃報 …… 9
  - 猿候橋親柱復元事業 …… 9
  - 修道中学校　身分証明書 …… 9
  - 来校者のご紹介 …… 10
  - 寄贈書籍のご紹介 …… 10
  - 旧広島城内土蔵(修道学問所(仮称))移築・復元工事進む …… 11
  - (中・高)同窓会ホームページリニューアル … 11
  - 会報誌『修道』創刊 …… 11
  - 住所変更手続きのお願い …… 11
  - ご注意 …… 11
  - 個人情報保護への取り組みについて … 11

ごあいさつ

同窓会会報誌「修道」が新しくなりました。

修道学園（中・高）同窓会
会長　髙木　一之

同窓会会報誌「修道」は、平成３（１９９１）年３月20日に創刊して以来、本年３月で21年目を迎え、発行号数は77号を数えております。ご存じのように修道学園には、様々な同窓生のネットワークがあり、そのネットワークからいろいろな情報の提供を受けております。

本誌はその情報を集め、同窓生会員の皆様に提供し同窓生同志、また同窓生と学校を結ぶツールとして幅広くご利用いただくことを願って発行してまいりました。

その「修道」が、このたび装いも新たにリニューアルをし、全ページカラーで内容を一新しました。新しい「修道」が、同窓生の絆を深め、さらに同窓会のますますの活性化の一助になればと願っております。

今後、会報誌の発行は年２回から年１回となりますが、質・量とも充実した紙面作りに努めてまいりますので、同窓生の皆様方には、引き続き様々な情報をご提供いただきますようよろしくお願い申しあげます。

修道学園同窓会通信　No.1

平成２年度
修道学園同窓大会開催される
— 1990.10.20 広島グランドホテル

1991（平成3）年3月20日　創刊号発行

支部総会報告

広島修道歯科医会第48回総会

平成23年11月5日㈯午後４時より「県民文化センター」にて25名の参加者を得て第48回総会が開催された。

椿田直也専務理事の司会により始まり、まず物故者への黙祷が捧げられた。続いて、小松昭紀会長の挨拶、久保康治常務理事による庶務報告、寺迫環理事による会計報告、佐々木正剛監事による監査報告と進み、協議事項である「修道歯科医会創立50周年事業」について議論され、平成25年11月９日に記念式典が開催されることと、50周年記念誌が刊行されることが決定した。

学術講演は、講師として広島大学病院口腔維持修復歯科　口腔インプラント診療科の阿部泰彦講師（高校34回）をお迎えして「安全・安心な歯科医療を目指して」との演題で行われ、歯科医療に関する適切な情報をわかりやすく提供することの大切さを学んだ。

懇親会は林正夫理事長、田原俊典校長をお招きして行われた。毎回、先輩後輩の枠を超えての無礼講となるが、今年も田原校長からの母校の現況報告に大変盛り上がり、修道学園のますますの発展を祈念して散会となった。

江能修友会

平成24年6月24日髙木会長にご臨席いただき第18回江能修友会総会が行われました。

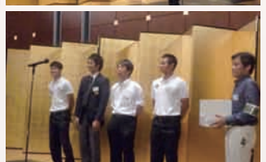
2012年度修道学園同窓会関東支部のつどい

「２０１２年度修道学園同窓会関東支部のつどい」が７月９日、東京ドームホテルで開催されました。今年は、以下のアイテムをテーマに①学生が参加しやすい趣向　②修道の「縁／絆」の最大活用③何らかの形で全員参加

Ⓐ最初のテーブル配置は業種別（①学生への就活の場の提供で②縁／絆の活用）

Ⓑ想い出の曲リクエスト集計・展示とバッググランドミュージック（③全員参加）

という形式をベースにしました。また、乃木元帥の佐藤正修道中学校主宛の書簡実物（関東支部より40万円提供）展示、63回・山縣亮太さんのロンドンオリンピック出場（関東支部より50万円協賛）という嬉しいニュースを基に山縣さん本人と田原校長先生のビデオレターが準備出来ました。



当日は梅雨の晴れ間、恒例の講演で行事がスタート。今回の講演者は、我ら高32回同期で慶應義塾大学・システムデザイン・マネジメント研究科委員長・教授・前野隆司さん「脳はなぜ「心」を作ったのか」をテーマとし、機械と人間の違いを分かりやすく講演してもらいました。３００人収容の会場はほぼ満員。皆が目を輝かせて聴き入りました。

総会は午後７時から始まりました。高55回・西村さんの軽快な初司会の下、関東支部も、そのオークション落札に協力した「乃木元帥の佐藤正修道中学校主宛の書簡」披露、書簡の主旨説明をして戴きました。改めて、修道の歴史の深さを再認識出来ました。また、山縣亮太さんのビデオレター投射も行い、東京支部全員での応援を誓いつつ、本人のご活躍を祈念しました。「故きを温ね新しきを知る」良い機会になりました。

アトラクションは、32回佐伯さんの同僚にお願いし、フラメンコを実演しました。時間として約20分、会場の皆さんを惹きつけました。

また、今回も「もみじ饅頭」のやまだ屋さんに、１２００個のもみじ饅頭のご提供を戴きました。おたふくソースさんには模擬店で、出来たての広島お好み焼を提供戴きました。この場をお借りしまして改めてお礼を申し上げます。

もう１つの目玉は「お楽しみ抽選会」。まさに発勝負のクジ引きで、今回はテーマにも有りますように①学生が参加しやすい趣向の下、六大学野球にて活躍中の４人のメンバー（新本さん／木村さん／山本さん／濱崎さん）に壇上に上がって貰い、抽選をお願いしました。東京ドーム会長でもある林会長からプロ野球の東京ドームでの試合チケットなどをご提供いただき、会場の熱い視線が壇上に集まる中、次々に当選者の氏名が呼び上げられると、歓声と拍手が沸き起こりました。その後、「ＳＴＡＦＦ腕章」を32回・菱川実行委員長から33回生へ手渡し、実行委員の引継をしました。総会の締めは校歌斉唱。卒業してから歌う機会も少なくなりましたが、32回全員が壇上に上がり、「安芸の小富士に～」と歌い始めると、後はすらすらと口に…。今回はエールを６回・高木恭之さんにお願いしました。ここでも世代を越え、修道の「絆」を披露する事が出来たと感無量でした。司会の55回・西村さんのタイムキーピングの下、ほぼ予定通り21時に終了の運びとなり、修道同窓会関東支部・野崎敬二幹事長から閉会を宣言（25回大利さんのお嬢さんの競歩でオリンピック出場報告も含め）して戴きました。「修道魂／修道の絆」を強く感じた１日でした。

支部総会報告

修道医会平成24年度（第56回）総会報告

修道医会事務局長　大段　秀樹（高33回）

修道医会は修道学園を卒業し、主として広島県内で医師として活躍している方々の集まりであり、会員数は約1000名です。昭和31年7月1日に発足して以降、毎年1回の総会、ゴルフ大会などを催し、今年度より家族会（野球観戦）も開催する予定です。さらに平成20年から学生部会をつくり、広島大学医学部の在学生のみならず、他大学医学部の在学生にもよびかけて部会としての活動を行っています。

今年度の総会は平成24年7月21日㈯、ANAクラウンプラザホテル広島を会場に午後4時30分より評議員会、午後5時から総会を開催しました。第14回学術奨励賞は井原基公先生（東北大学医学部産婦人科助教・高44回）が、生化学領域の学術の〝タンパク質合成の触媒反応の活性中心を形成するリボソームRNAのバリアントの解析〟に関する論文業績によって受賞されました。第5回文化功労賞については、品川晃二先生（高2回）が永年の地域医療へのご功績、さらに図書館長（広島国際大学）、書道漢字部師範、府中市美展招待作家としてのご貢献等を対象に受賞されました。

次いで午後5時半より特別講演として、名古屋大学生物機能開発利用研究センター教授の日比正彦先生（高34回）より〝脊椎動物における体軸形成と神経発生機構〟を、広島大学病院形成外科教授の横田和典先生（高35回）より〝形成外科で扱う再建手術〟を題した講演を拝聴しました。

午後7時からは会場を移して懇親会を開きました。井内康輝会長（高19回）、ご来賓の林正夫修道学園理事長、高木一之修道学園同窓会長にご挨拶を頂き、田原俊典校長から学園の現状を伺いました。さらに前述の賞の表彰と受賞者の謝辞が続き、岩森茂先生（旧中36回）のご発声で乾杯して懇談に移りました。途中で、新任の柳井医療センター院長、住元了先生（高28回）、廣島総合病院院長 藤本吉範先生（高23回）、広島市病院事業管理者、影本正之先生（高22回）のご紹介、ご挨拶がありました。学生部会からは9名が参加し、自己紹介をして頂きました。今回の参加者は78名でありましたが、最後に肩を組み校歌を斉唱し、修道健児の心意気を示すとともに、今後の各分野での個々の活躍と修道同窓生としての連携を確認した次第です。

平成23年度九修会総会報告

九修会事務局　石本　俊亮（高27回）

後列:三好（H01）、浅海（S62）、近藤（S49）、小柳（S55）、黒田（S38）、濱岡（S41）、石本（S50）、石本（S40）
前列:花岡（S38）、秋山（S36）、青原（S34）、石村（S35）、皆川（S37）、田島（S37）

平成23年度の九修会総会は、例年どおり、年の明けた平成24年1月28日に開催しました。今年は、新幹線の開通もあり、例年より1時間早い、17時より開催しました。総会開催直前に、井上会長が虫垂炎で緊急入院されたため、少し寂しいスタートとなりましたが、今年度は、いつものメンバーに加え、北九州方面より昭和62年卒（浅海氏）、平成元年卒（三好氏）の若いお二人を迎え、バッジの色を含め、幅広い話題で盛り上がりました。

昭和36年卒の秋山先輩が、2月熊本城マラソンでフルマラソンにチャレンジされる話や、昭和37年卒の田島先輩のリタイア後の充実した生活ぶりなど、多くの刺激を受けることが出来、3時間があっという間に過ぎていました。来年度、新しいメンバーの方も、周りの友人を誘って参加するとのことで、20年目の総会を待ち望みつつ、校歌で締めくくりました。後日談ですが、昭和34年卒の青原先輩とは、赤坂（福岡市内）で、偶然に杯を交わす機会を得ることができました。劇団の支援をされているということで、皆さんの活動の幅に、改めて、驚かされたところです。

班OB会総会報告

硬式テニス部OB会

柴田　和広（高27回）

テニス交流会に続き、午後6時から広島市内のホテルで今年度のOB会総会と懇親会が開かれ、現役のテニス班員7人も含め30人が参加しました。

今年のインターハイは、個人戦シングルスで田鍋君（2年）が全国大会出場の切符を得ましたが、団体の部は県大会の準決勝で敗れ、4年ぶりの出場は叶いませんでした。総会冒頭のあいさつで大岡会長は、「技術的な問題ではない。勝負への執着心がないからだ。」と、会場の現役生に対し異例の喝を入れました。それでも今年の主力組が来年も残ることから、住田コーチは、「来年の出場は十分期待できる。」と紹介。早くも夢を膨らませるOBもいました。一方で、「その前に勉強はちゃんとしとけ！」と、釘を刺す発言もあって修道らしさをうかがわせました。中華料理をつつきながらの懇親会。OBにとっては現役生との貴重な交流の場とあって、酔いの助けも借りながら、叱咤激励から「彼女はおるんか？」という迷惑な質問まで、オジサンたちも積極的に発言していました。最後はともに肩を組んで校歌を斉唱、若かったあの頃に思いを馳せました。

四期会報告

河野　富士雄（高4回）

今年の四期会総会・懇親会は、恒例の6月第2土曜日が故あって1週間遅れの6月16日㈯に中区大手町の鯉城会館で開かれました。参加会員31名、恩師田中喜久治先生がお出になりにくいご事情にもかかわらずきてくださいました。12時、会場の外で写真撮影。着席後まず黙祷。この1年間の新たな物故者は7名、年ごとに会員が減っていくのは、年齢からいってやむを得ないこととはいえ、寂しいことです。田中先生のご挨拶、河野からの報告事項は「蔵」募金の件、同窓大会の件、7月15日廿日市文化ホールにおける三浦高明君が所属する合唱団の公演の件。そして明慶寺住職長坂君のありがたいお話付乾杯のご発声で歓談に移りました。歓談中の全員のスピーチで特筆すべきは市議会議長木島君が1月26日の東京広島県人会に出席したら広い会場で同期のだれかれに会ったという報告。

名残の尽きぬ中、校歌と万歳で14時お開きとなりました。

(4列目左から)毛利、大島、上野浄、大下明、宗像、平見、重見
(3列目左から)中村富、長坂、大巳、合原、伴、行友、三吉
(2列目左から)稲富、火浦、梅田、岡野、木下、松川、伊藤、奥本
(1列目左から)斉藤公、上野広、土井、田中先生、河野、門、内藤、花輪
※写真に入ってないが、木島、綾部も会には出席

同期会報告

大寅会

大寅会幹事　横田　守（高9回）

昭和13年・14年生まれの9回生は42歳時、10数名有志で故有本君のお世話になり厳島神社で「厄払い」をして頂き、その後の食事会で皆「トラ」になるまで飲んで楽しい時を過ごしました。その席で、これを機に毎年9回生で集まろうと言う事になり、会の名称を昭和13年「寅年」と大酒飲みの「トラ」とを合わせて「大寅会」と名づけました。それ以来「大寅会」は、故西村正君が幹事役を務め、夫妻での参加も歓迎し発足から30年余り盛大に続行しています。

他界された方の奥様方も参加され、男ばかりの集まりに「華」を添えて頂き70名前後の集まりで、毎年、正月最終金曜日の夜に開催を恒例としています。

また「大寅Golf」も120回を重ね20名前後で元気にプレイしています。

修道12回の足跡

増本　光雄（高12回）

私たち12回生が初めて同期会を開いたのは28歳の時であった。卒業して10年。同窓大会の担当を任されたあくる年からであった。それから70歳まで42年間欠かさず1月12日に開催してきた。

その間、卒業30周年、40周年、50周年と記念大会を3回開催した。最初が150人余。2回目が120人余。3回目が100人余と、10年ごとに20パーセントずつ出席者が減ってきている。これは已むえない自然現象であると認識している。

さて、毎年の通常の同期会の方も、近年は著しい減少傾向に見舞われていた。同期会がマンネリに陥っていたのである。

2011年。幹事を交代して、内容の一新を図ることにした。①年金生活者が多くなったことにより、これまでよりも大幅にリーズナブルにする。②会場を交通の便利の良い市の中心部に移す。③老人に優しく、姿勢が楽で、気軽に交流が図れる椅子席にする。④案内状を封書にして、幹事の熱意を文章でもって、強く訴えるという4点をコンセプトに開催してみた。結果は参加人員50パーセント増の62人。特にうれしかったのは52年ぶりという初参加者が6人も加わったことであった。

来年度はさらに、30パーセント増しの80人強を目指して、①開催時期を老体に合わせて、もっと気候の良い季節を考えてみる。②番出席しやすい曜日を選択してみる。③ゆったりとしたもっと広い会場を探してみる。この3点のコンセプトを加えて再検討してみることにしている。

「古稀の絆」とイチサン会

卒業50周年記念誌編集委員　益永　茂治（高13回）

私たち昭和36年（1961年）3月卒業の第13回同期生は、昭和56年、卒業20周年を記念して最初の全体同期会を開催、以降およそ5周年毎に集まってきました。その後、平成9年、関東地区で「修道イチサン会」（現、関東修道イチサン会）が発足し、毎年5月と11月の13日に例会を開催しています。これに倣って平成17年以降広島地区に「修道イチサン会」が発足、毎年4月と10月の13日に例会を開き、事前に各組代表数名で構成された世話人会で次第や事業計画などを協議しています。また関東・広島での例会にはその時の代表数名が相互に参加し連携を密にしてきました。

昨年（平成23年）10月15日、卒業50周年と古稀を記念して全体同期会「古稀を祝う会」を開催、当日の参加者は109名、協賛者92名、合計201名の多きを数えました。

この50周年記念事業として、記念式典・懇親会の他に4つのオプショナルツアー（母校訪問・ゴルフ大会・マツダスタジアム見学・厳島神社参拝）と記念誌の編纂を行いました。

特に、50周年記念誌「古稀の絆」は「全員参加で作る」を目指して同期生から中・高時代の写真の提供と寄稿文を募ることにしました。集まった写真は「古稀の会」当日の写真を含め約1000枚、8名の恩師の先生方から「古稀に寄せて」と題するお言葉を頂いたほか、寄稿文は72編に上りました。

記念誌の構成は5章から成り、Ⅰ.古稀の会（記念式典・懇親会）、Ⅱ.修道の想い出1（当時の時代背景と中学時代）、Ⅲ.修道の想い出2（高校時代）、Ⅳ.卒業後の歩みと絆、Ⅴ.寄稿文集　の総計196頁となっています。

編集に当っては「単なるアルバムでなく寄稿文と共に出来るだけ事実を掘り起こして記録的な価値も持たせる」ことを全編に渡って心掛けました。学園の歴史、山田十竹先生の教え、我々の襟章「黄バッジ」や中学制服の白線の由来、母校記念品室の取材を契機とした「先師祭」の想い出など先ず、修道の伝統を背景に描き出しました。そして、学園行事のほか班活動、納付金や成績表など当時の暮らし振り、女子校を含む他校との交流や校外活動などを編集委員4人（恵下弘文、木村正勝、花岡　宏、益永茂治）それぞれの得意領域を生かして分担し、当時の学園生活を余すことなく活写した積りです。

寄せられた写真と当時の校内配布資料は珍しいものも多く、特に中学時代の臨海学校での親子の様な先生方との交流を示す写真や今回発掘された高校時代の授業中の先生方の「隠し撮り」写真は、先生方の生徒に対する温かい気持ちや熱心に教育に取り組む姿勢を彷彿とさせるもので、私たちの今日あるは、正にこの6年間の先生方の薫陶と修道の校風のお蔭であると言っても過言ではありません。

そして、本年（平成24年）4月13日には第12回修道イチサン会の例会が開催され、55名が出席、完成した記念誌を配布（関東地区及び不参加の協賛者には郵送）、併せて編集委員から編纂の経緯と苦労話を披瀝しました。この会に当たり、沢山のメールや郵便で絶賛の声が寄せられましたが、当日遠路出席した沖縄在住の故高橋俊三君＊1から、「この記念誌は我々が修道で学んだ時代の証であり、修道生となれたことは「生の誇り」という趣旨の感動的なスピーチは正に私たち編集者が目指したことでありました。

終りに当り、この記念誌の刊行は、同期の皆様の熱心なご協力の賜物であり、特に、立派な1次資料が集まったことが、私たちのモチベーションを高めることにもなりました。また、いつも暖かい目で物心両面の協力を惜しまなかった山根恒弘高校13回代表世話人を始め、要所要所で編集会議にも加わって頂いた猫本幸雄君、天川　等君それに各組世話人各位、関東修道イチサン会の木下武昭君、田島　孝君、熊本敦兆君ほかからも親身なご協力と助言を頂きました。ここに、厚く御礼申し上げます。

＊1注）この会の前後、母校や瀬戸内海の風景を楽しんで帰って間もなくの5月14日急逝されました。

H24.4.13　第12回修道イチサン会出席者記念写真
ホテル・センチュリー21広島

一期一会のいつか「回顧録」

五日会の若竹　藤田正明クン

森山　純爾（旧中29回）

平和大通りに面する4階建てのコケ蒸すビルが崩れるほどだった。

「バンザイ！　バンザイ！」が渦巻いていたからである。

昭和40（1965）年7月5日の深夜だった。我らの修道OBがひと仕事を終え、大勝利を自ら祝う万歳！の雄叫びはいつまでも続く。

私とは1期後輩の藤田正明君（旧中30回）が参議院議員選挙広島全県二区（定数2人）に断トツで初陣を飾った夜半のことだった。

その渦を交い縫うかのように、竹内徳三君（旧中31回）が同輩の細川健太郎君と何やら話し合っている。結論が出たようだった。ここで、竹内君十八番の印籠の出番となる。

「諸君、静まれ、静まれい」

全員の私語が収まると、竹内君がこう口を開いた。

「我らの勝利は別として、正明先輩の任期は後6年あるが、いつ念願の衆院選（旧広島1区）に打って出られるかもしれない。常在選挙の陣立てで臨まなければならない」

ここで、ひと息ついて、こう続く。

「それで…、みんなが正明先輩の秘書役になろうじゃないか。その会名は今日になぞって五日会と呼ぼう」「オー！　オー！」

その握りこぶしは約30人分？と推定された。これが「五日会」の力強い産声だった。

私は本陣の選挙事務所で世話役に精を出していた。運動資金は誰にも一切出さず仕舞い。というより、その方便を知らなかった。それでか、本陣に議員族は一人も顔を出さない。

ただ一人、池田勇人衆院議員（旧広島3区）の城代家老・川田泉県議（豊田郡選出）だけが指揮棒を振るっていた。大平正芳衆院議員（香川県選出）が池田勇人先生の秘書官を勤めていた関係で、正明君の陣営へ馳せ参じたのである。

それに県議を狙って遊んでいた伊藤忠男先生（元広島市議長）と、同じく県議を目標にしていた上迫邦彦君、選挙カー班長の松井幹君（旧中30回・旧廿日市町議員）らしか玄人はいなかった。みんなボランティアである。それを聞いた正明君はこう感心していた。

「有り難いね。こんな言葉を思い出すよ」

「難有り　有り難し」（黒住教祖）

それにもう二つ続いた。

「艱難汝を玉にす」

「艱難は吾人進歩の関門なり」（新島襄）

そうこうするうちに、前記の伊藤先生からこう申し出があった。

「五日会」全員に発破を掛けたのである。

「みんなの内から2年後の広島市議会へ出馬させる男はいないのか」「寄り合う者は久しからず」（池谷太郎東京製鉄会長）

そうあってはならない。みんなで話し合う。

正畠明雄君（高1回）に白羽の矢が立てられた。当時は広島全市選で正畠君は悠々トップ圏で当選した。「五日会」の「選挙にはアマもプロもない。とにかく歩こう」はかなり行き渡っていたようだった。同会のメンバーも115人に増えていた。

正明君は以後、参院議員選で4度連続当選。ついに三権の長の一人・参院議長の席に就いたが途中で病に倒れた。長子の雄山君（高20回）が衣鉢を継ぎ、県知事へ転身する。

その正明君は今年5月27日、17回忌を迎えた。「五日会」は「藤田正明先輩を語る会」と銘打って集まった。正明君は諸君の心の中に生き続けている。それで、その集いの会名を「藤田正明先輩」と語る会」と独断で改め、じかに正明君と語ることになった。参加者は34人の盛会で、それぞれの思い出を語り掛けると、正明君は矢つ張り生きているのではないか。正明君は蹴球マンで、ニックネームはボチ。お手伝いさんがボッちゃんとよんでいたのに由来。見出しのような蹴り句を詠む。

夏藤の墓地けり揚げて天の国
五月晴れ醜名を付けしお手伝い

話を元に返そう。「五日会」諸君自身のうちにも選挙に慣れてきたのか、続々議員が増え出した。初めは同窓会名簿の充実からスタート、「歩け歩こう、とにかく歩こう」が続いている。それにつれて寝ていた同窓会も活性化の兆しを見せた。年々の同窓大会にも百人足らずから千人を越え、基金もゼロから数千万円に膨れた。どこの学校同窓会基金よりも内部保留がうんと多くなった。

私たちの後援会事務所は、選挙後は広島市内1か所で済ます。それで全県の市町村の面倒をみた。衆院議員の事務所は当時、全県3区で、私たちの3分の1なのにそれぞれの要員は倍以上も常駐。その半分以下でなぜ遣り繰りできたのだろう。それは「五日会」諸君に負んぶに抱っこしてもらったからである。

彼らはいつも自前で始末してくれる。資金は事務所からは一切与えず済んだ。有り難い秘書たちではある。ただ彼らは歩きで何かを得たはず。それが役得というものであろう。

その陰には正明君の一期一会を重んずる気配りがあった。初対面に対する包容力が深く、人脈も縦横から天と地にまで、立体的な人の血管並みになっていった。こんな政治家とそれを支援するグループが日本のどこにあろう。その姿は「戦陣訓」ならぬ、文字通り「先人訓」の先駆けだった。世間はまだ、愚者の集まりにしか過ぎないと、思うかもしれない。

「努力しない天才よりも努力する鈍才のほうが余計に仕事をするだろう」（イギリスの著述家、ジョン・アブェブリー）

「五日会」の諸君はそう確信しつつ、ボランティアで歩きに歩いた。

正明君には絶えず、こう進言していた。

「お金は広島では必要以外にはビタ1文も不要。中央で使うべし」

正明事務所は「ケチ田後援会」と非難を浴び続けた。ウチは金持ちである。それを狙って近寄るのは当然だろう。配るような顔をして様子をみた。やらないので逃げていく。それで終わり、追っかけないに終始した。次の選挙ではまた資金欲しさの新人がどっと集まる。前回と同じことの繰り返しだった。その裏には「五日会」の「歩く」諸君がいるからカバーできたのである。

「人の一生は重荷を負うて遠きを行くが如し」（徳川家康）

正明君は、その遺訓をこう解釈していた。

「重くとも、わが荷は人に、ゆずるまじ」

「になうにつれて、荷は軽くなる」（新島襄）

私たちにとって、重荷を軽くしたのが、自由民主党の右近仁事務局長だった。私と同じ学級（旧中29回）で、感謝、感激である。

右近君の長男謙一君も修高20回卒で、その父の親馬鹿？　が申すには…、

「うちの長男は親孝行の見本だよ」

その子は修高卒後、防衛大学校へパス。授業料は全くのゼロどころか、給与もいただき、親の脛を齧らなくても勉強に精進、卒業して自衛隊航空陸上所属を拝命する。

当時、各省庁のうち、防衛庁だけがOBも現役からも衆院議員に出た人物はいなかった。

そこで長野4区に防衛庁現役の村井仁さんが挑んで当選、その秘書官に右近謙一君が抜擢される。その後何年か経って村井議員は長野県知事に鞍替え、ここでまた謙一君を知事秘書室に呼び込んだ。

筋書きは一転…。かの小沢一郎元民主党代表の秘書らが政治資金規制法違反の疑いで逮捕され、身柄拘束で取り調べられた。家宅捜索も受ける羽目に陥る。その時、小沢さんは東京地検に厳重な抗議を申し入れた。

「逃げも隠れもしないのに身柄を拘束。証拠隠滅をしないのに家宅捜索するのは検察の行き過ぎだっ」

小沢さんの疑惑の裏　秘書の自殺予防

その裏には、こんな経緯があった。

前記の謙一君が自殺したという。あれこれあって、長野地検は県知事が政治資金規制法に触れた疑いで、謙一君を任意出頭で取り調べの最中の自殺だった。側近の死で立件不可能になった。地検の大失敗といえる。そこで小沢さんの場合は長野の二の舞を演じないよう、強硬手段を取ったのだった。

天国の右近仁君には、同輩の子として同情に耐えず慰めの言葉が見つからない。冥福を祈るのみ。今後は彼らの親子の安眠を祈りつつ、私の余生を捧げたい。今までの政治活動の守護神を明かして、この語りを二応締めくくろう。

そのつは、何かを意図して行うには、最悪の場合を予想し、それに対する出方を考えて置くことに尽きる。加えて「歩け歩こう」にもプラスするものがある。「考えて」「歩く」である。

かの岡山県倉敷市の大原美術館には「考える人」と「歩く人」とが座っている。フランスの彫刻家ロダン（1840～1917）の作品である。歩きながら考えると、新しい手立てが浮かび上がる。その繰り返しで終始すれば〝力〟はうんと膨らむ。心身の重みは激震する。行き詰った際、その薬効が生まれる。次の名訓も忘れてはならない。

「死ぬ時は仕事の最中であって欲しい」

16世紀フランスのモラリスト、モンテーニュの名言である。正明君はまさにその通りだった。参院議長室で倒れたのである。恐れながら、本望だったのではなかろうか。哀悼の意を捧げながら、正明君の仕事ぶりを思い出す。

「天才は、1％の霊感と99％の汗」

これは発明王トーマス・エジソンが新聞社のインタビューに答えた機知。正明君の仕事に対する態度にぴったしである。その充実感については、弘法大師の次の教えになる。

「山高きが故に貴からず、機あるを以て貴しとなす。人肥えたるが故に貴からず、智あるを以て貴しとなす」（『実語教』）

外観より中身が大事という教えで、寺子屋向けの平易な表現である。

これには、お茶を濁さず、沸かして飲んでみよう。茶によって得られる澄んだ心は、ひと時の安楽を与えてくれる。だれでも嫌なことは多くあるが、それを飲んで、しばしこの世の喧騒を忘れ、小休止することも必要であろう。この語りも長くなった。こちらもこちらで、小休止させてもらう。

「五日会」の過去&今～未来について積み残した秘話も多くあるが、生きておれば、次の号にでも語り継げたならと、愚考する次第。乞うご期待！

この語りが終わる前に寸言を付け加えよう。正明君は、新聞記者の私に三顧の礼を尽くしてまで、なぜ陣営に引き込んだのだろうか。「五日会」「メンバーのうち、「歩き」疲れて倒産寸前に追い込まれたり、逆にもうかったりの悲喜劇が演じられた。その都度、正明君はどう対処したか。そんなあれこれを次の号で語ってみたい。

今の行き先不透明な時代に政治家やその支持者諸氏にとって本当に必要なものは何だろう。目先の利害、損得を超越した骨太なスケールの大きい人間的精神ではなかろうか。

「できる人間より、できた人間になるほうがむずかしい」（疾風ニ勁草ヲ知ル）「後漢書」

勁草は強い草。風がなかったり、弱い時には草の強弱は分からない。強風で弱い草が倒れた時に初めて強い草の存在が分かる。「草」はたとえである。

平穏無事な時には、人間の真価や実力は分からない。困難な事態にぶつかった時、初めて人の有能、無能が分かる。それでは、逆境は自分の秘めた力が認められるチャンスということにもなる。

艱難に鍛えられて力がつき、その力は、また別の艱難において発揮され、人に知られる。人生はそういうことの連続であり、それが成長ということでもある。要は、人並み以上の苦労を重ねて、一味違う人間になりなさいと、論しているわけ。

西郷隆盛も、同じような言葉を吐いている。

「予、壮年より艱難という艱難に罹りしゆえ、今はどんな事に出会うとも動揺は致すまじ。それだけ仕合わせなり」

『史記』（司馬遷著）に曰く

「人窮スレバ即チ本ニ反ル」

「本」とは、なんだろうか？

人間を人間たらしめている根元、という意味なら、天でもいい、神でもいい、要するに、「自分以上のところ」であるわけだ。その超越的なものは、わが魂の底に内在している。

行き詰まって、人間的な知恵ではどうにもならなくなり、これをかなぐり捨てた時、人は自然に「本ニ反ル」。それが天につながって、本然の自分に立ち還る。その時、自分を越えた神知、仏知がおのずからヒラメキ、はたらく。それで、窮地から脱出できることになる。心に私という雲があると、本ニ反ルことができず、窮スレドモ通ゼズ、となるわけ。

最後に、正明君に二つの名言を贈る。ゆっくり休んでくれ給え。

ドイツの哲学者カント（1724～1804）の言葉にこうある。

「疑う余地のない純粋な喜悦の二つは勤労のあとの休息である」

米国の政治家、フランクリン（1706～1790年）の遺訓を添える。

「疲労は最大の枕である」

中締めとして、「五日会」の長老の一人、永谷道孝君（高2回）の喝破！をどうぞ…。

チャップリンの「殺人狂時代」（米国映画）

「一人を殺せば犯罪者だが、百万人を殺せば英雄」

藤田正明先輩の「反骨風雲録」

「一人だけを生かせば人殺し、百万人を生かせてこそ政治家」

『藤田正明先輩と語る会』17回忌を終えて

無事に、会を終えることができました。今はほっとしているところでございます。てんやわんやではございましたが、その時の記念写真とスナップが出来上がりましたのでさっそくお送りいたします。

この度の会は92歳の森山純爾先輩がすべての企画を練ってくださいました。それを後輩がサポートしました。なにしろ、アイディアが泉のごとく湧いてくるのが森山ブレインでありますから、ついていくのが大変でした。

ともかく、多くの成果を残して会は無制限に流れることなく進行しました。最後はなんとなく時間内に折り合いがつくというのが、修道健児の見えざる団結力であると感心致しております。

「藤田正明先輩と語る会」（正明忌）十七回忌　平成24年5月27日

(3列左)黒木君、林君、本田君、永谷君、大塚君、藤高君、佐伯君
(2列左)橋本君、奥窪君、石本君、上向井君、岡本君、上向井君、河野君、中吉君、正本君、仁井田君
(前列左)森山君、伊藤君、藤田公康君、藤田荀君、藤田雄山君、藤田恵子君、仁井田君、高村君、小林君、杉井君、吉崎君、増本君

第30回オリンピック競技大会

2012/ロンドン 陸上競技

ご報告と御礼

2012年7月27日から8月12日までイギリス/ロンドンにて開催された第30回オリンピック競技大会に陸上競技日本代表として出場して参りました。

たくさんの皆様からご支援と応援をいただいたおかげで、日本代表としての誇りと期待を背負いオリンピックに参加することができました。心より感謝申し上げます。

8月4日に行われた男子100m予選は、今期世界最速タイムを誇るヨハン・ブレーク選手と同じ第6組での出場です。追風+1.3mの好条件の中、自己ベストとなる10.07秒・組2着で準決勝へと進むことができましたが、これはオリンピック男子100mで日本人歴代一位の記録でもあります。自分の信じたレースプランで走りきることだけを考えて臨んだ結果、世界でも通用する手ごたえをつかめたことは大きな経験でした。

翌5日に行われた準決勝では第3組5レーンを走ることになり、左にタイソン・ゲイ選手、右に予選と同じヨハン・ブレーク選手に挟まれた中でのレースでした。結果は組6着で残念ながら決勝に進むことはできませんでしたが、追風+1.7m・10.10秒のタイムは自身のサードベストになりました。中盤まではゲイ選手・ブレーク選手と並走できた手ごたえ、ゴール直前での意識面の反省など、必ずこれを今後の競技生活に活かしていきたいと思います。

団体戦となる男子4×100mの予選は8月10日に行われました。大会前の富士合宿から1走を務めることが決まり、このメンバーでの公式戦初披露でしたが、全員のバトンワーク・走力ともうまくかみ合い、組2着（全体四位）38.07秒のタイムで決勝へ進出することができました。これは日本チームのシーズンベストであり、歴代二位の記録になります。

前回の北京大会同様、メダルを目指して臨んだ決勝は11日夜9時（現地時間）に始まりました。ボルト、ブレーク選手を擁するジャマイカが36.84秒という驚異的な世界記録を打ちたてて優勝しましたが、日本チームとして出した38.35秒の記録は悔しい結果であると同時に、世界を相手に戦える手ごたえも大きくつかめたレースであったと思います。今回の五位入賞に満足することなく、これからも日本男子リレーチームの中で力を発揮していきたいと考えています。

応援して下さったたくさんの皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。この貴重な経験を更なる自分自身の成長の糧とし、これからの陸上競技人生を歩んでいきたいと思いますので、今後とも変わらぬご声援をよろしくお願い申し上げます。

ありがとうございました。

平成24年8月吉日

慶應義塾大学競走部
ロンドンオリンピック　100m・4×100m
日本代表　山縣亮太

山縣亮太選手 ロンドンオリンピック出場 壮行会

中村靖富満（高30回）

私たちの同期（高校30回）の山縣浩一氏の次男亮太君のロンドンオリンピック出場（陸上100m・400mリレー）の壮行会が、平成24年7月9日（月）19時からANAクラウンプラザホテル広島で開催されました。当日は、同窓生や教職員・PTAそして関係者など、300名を超える皆様のご参加をいただき大盛会となりました。

発起人代表の修道学園　林正夫理事長のご挨拶を皮切りに、来賓の皆様、そして林理事長の要請で急遽駆けつけていただいた、JOCのロンドンオリンピック日本選手団　橋本聖子副団長と市原則之専務理事に激励の言葉をいただきました。橋本副団長、市原専務理事それぞれから、「選手の活躍で東日本大震災の被災者の方々の心を元気にしたい。」というメッセージがあり選手・関係者の強い想いが伝わってきました。

続いて、同窓会連合会、中高同窓会、関東支部、近畿支部、その他大勢の皆様より心のこもった激励費が山縣選手に贈呈されました。花束の贈呈は、メルボルンオリンピックサッカー日本代表の下村幸男先輩（高校2回）から、応援旗（寄書き）の贈呈は、山縣選手の同級生（高校63回）4名より行われました。

そしていよいよ本人の決意表明では、「怖いもの知らずで思い切って走る」と力強い口調でその意気込みを語ってくれました。その意気込みに負けないような、校歌斉唱や慶應義塾大学応援指導部のエールにより会場内は大いに盛り上がりました。最後は、田原校長の音頭で万歳三唱が行われ壮行会を終了しました。

短い準備期間にもかかわらず、発起人の皆様のご尽力と学園事務局の献身的なご協力、そしてご参加いただいた皆様、ご寄付いただいた皆様のおかげで、とても盛大な壮行会となり、発起人の一人として皆様に感謝を申し上げますとともにとても感動しております。

個人的には、私が修道に通っていた頃から気さくに声を掛けてくださっていた、亮太君のおじいちゃんおばあちゃんの本当に嬉しそうな笑顔がとても印象的でした。亮太君が生まれる前に父の浩一氏が大きな病気を患って本人や家族が大変だった時期があり、そのことを思い出して私も胸が熱くなりました。

ロンドンオリンピックは7月27日に開幕し、山縣亮太選手は8月4日の試合から出場します。修道健児としての誇りと気概をもって力強く戦って欲しいと思います。

皆様の暖かい応援をお願いいたします。

山縣亮太選手（高63回）

訃報

次の方々がお亡くなりになられました。
心からご冥福をお祈りいたします。

幹　事　両祖　　勝　氏（高１回）
評議員　中村　陽一　氏（高５回）
評議員　碓井　静照　氏（高８回）
評議員　熊野　　直　氏（高24回）

猿猴橋親柱復元モニュメント設置のための募金始まる

広島市南区の「猿猴橋復元の会」（会長 大橋啓一、相談役 花輪敬三（高４回）、副会長 増本光雄（高12回）、副会長 新田実（高17回）、副会長 可部典良（高21回）ほか３名）は、大正15年に竣工された猿猴橋の親柱を猿猴橋河岸にモニュメントとして復元するための募金活動をはじめました。

「猿猴橋の誕生は、およそ４００年前の毛利輝元の広島城築城までさかのぼります。その後、猿猴橋に架かる唯一の橋として、参勤交代を始め、人馬の往来など大動脈としてにぎわいを示してきましたが、大正15（１９２６）年に木造から、当時のあらゆる人知と技術を結合させて、現在の形の鉄筋コンクリートの永久橋に架け替えられました。

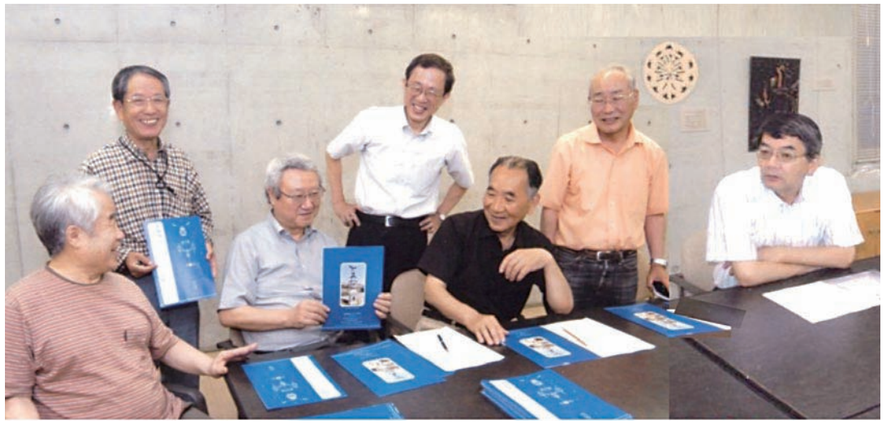
当時、橋の建設を請け負った妻木組の妻木伊三郎氏が私財を投げ打って、採算を顧みず、大正ロマンの結晶ともいえる親柱に鷲をあしらった立派な装飾を施した橋に仕上げました。

その後、第２次世界大戦中の昭和18（１９４３）年に軍の『金属供出令』により、橋上の金属部分はすべて撤収されてしまいました。」（趣意書引用）

猿猴橋復元の会では、まずは親柱を忠実に復元することから始めることにしました。このモニュメントの完成の後には、次には欄干の装飾に使われていた「２匹の猿が桃を捧げ持っている透かし彫り」の製作に取り組む予定です。

この復元事業に興味のある方は、下記の事務局にお尋ねください。

「猿猴橋復元の会」事務局
〒732-0824　広島市南区的場町１丁目 8-15（広島芸術専門学校内）
TEL（082）506-3061　FAX（082）506-3062
Eメール：k007@art-hiroshima.com



（左から4番目）可部典良氏（高21回）　（左から5番目）増本光雄氏（高12回）　（右端）新田実氏（高17回）

修道中学校身分証明書

奥本　博（旧中39回）

この写真は私たちが昭和18年４月、修道中学校へ入学をしたとき貰った身分証明書です。前校長吉田賢龍先生のお名前を当時の國崎登先生とゴム印で訂正をしてあります。裏面に有効期間は１箇年とあり、進級して新たに交付を受けた場合は、学校に返すこと。また、登校の際は必ず携帯をするよう記載をしてあります。私は当時進級をしても新たに交付を受けた記憶はなく、そのまま常に持っておりました。

戦争がますます激しくなり、時々の勤労奉仕に出かけたとき、更にその後の連日の学徒動員のときも肌身離さず持ち続けました。そして昭和20年８月６日のあの原爆です。現在も修道中学へ入学したときの思いを誇りに持ち、身につけて持ち歩いております。

〈裏〉　〈表〉

修道中学校、修道高等学校にご来校

６月６日修道高校６回卒の修六会喜寿の会にご出席のため来広。今年は特別な会で、東京より８名、恩師保澤治先生を含め総勢65名の参加。盛会とのことでした。

６月８日にご訪問、田原校長とご歓談後撮影させていただきました。（本館前での１枚）

左から　石崎 熈氏、和田清治氏、髙木恭之氏

ご寄贈　書籍

田中　康夫氏（高5回）

沖縄国際大学名誉教授・博士（文学）
高橋　俊三氏（高13回）
平成24年5月14日ご逝去
心からご冥福をお祈りいたします

青柳　陽一氏（高9回）
（3冊）

高校13回同期会記念誌、DVD（付属）
本編「古稀の絆」とイチサン会
をご覧ください

東京工芸大学工学部　非常勤講師
神奈川大学理学部　　非常勤講師
山本　靖氏（高13回）

編著　今子　正義氏（高7回）
監修　下村　幸男氏（高2回）

(中・高)同窓会ホームページ リニューアル

URL http://www.shudo-h.ed.jp/dosokai/

上記URLからご覧いただくか、修道中学校・修道高等学校ウェブサイトから卒業生の方→修道学園(中・高)同窓会とアクセスされてもご覧いただけます。

同窓会会報誌「修道」 リニューアル

全ページカラーにし
より見やすくしました。

お便り募集

会報誌「修道」は同窓生の皆さまからの情報、ご寄稿により制作しております。

・同期会、支部会、班OB会の情報・近況報告など

をお寄せください。

なお、紙面には限りがありますので字数の多い場合は(中・高)同窓会ホームページで掲載いたします。

詳しくは、下記の**同窓会事務局**までお問合せください。

会報誌創刊号に合わせて題字を
吉田学先生(高21回)に新たに書いていただきました。

個人情報保護への取り組みについて

本会では、会員相互の親睦を図るという同窓会活動の目的を果たすために、たくさんの個人情報を保有しています。

言うまでもなく個人情報は個人の重要な財産であり、これまでも皆様から収集した個人情報は適正に利用し、厳重に保護・管理してきました。

2005年4月からの「個人情報の保護に関する法律」の全面施行に伴い、今後とも本会に関わる全ての皆様に安心していただけるように、個人情報の保護に取り組みます。

旧広島城内土蔵
(修道学問所(仮称))
移築・復元工事進む

土蔵の移築・復元工事は、棟上げ、瓦葺き、荒壁塗りの工事が終わりました。

これから、2カ月の養生期間を置き、11月から中壁塗りの工事に取りかかります。

建てられた当時の重厚で風情のある姿を現しています。蔵の外観は、ご覧いただけますので、お近くにお寄りの際は、是非ご覧ください。

なお、蔵移築・復元事業に対しまして、同窓生の皆様より多額のご寄付をいただき厚くお礼申しあげます。8月末現在、同窓生からの募金額は、三千万円余りとなっております。募金は、9月末まで受け付けておりますので、引き続きご協力をお願いいたします。

住所変更手続きのお願い

住所・電話番号・名前・勤務先などが変わられた方は、変更手続きをお願いいたします。

(中・高)同窓会ホームページ、住所変更登録フォームまたは名簿内添付はがきに必要事項をご記入後、下記の同窓会事務局までご連絡をください。

※同窓会事務局からのご案内ができなくなりますのでご協力をお願いいたします。

ご 注 意!!

修道卒業生の実家に息子と偽って、振り込め詐欺の電話が数件かかってきております。被害も確認されておりますので、注意していただきますようお願いいたします。

本同窓会が発行しております同窓会名簿は平成22年3月に発行いたしました第35号が最新版となっております。今後は5年後に名簿改正を行う予定です。

悪徳業者が偽の名簿を販売するケースが頻繁におこっております。文章のなかに「同窓会とは一切関係ありません」と一文ありますので同窓会としては抗議することができません。あやしいはがきや電話等にはお答えにならないようご注意ください。

本同窓会が名簿を作成する場合必ず同窓会長名で調査を行います。(今回は「株式会社サラト」に業務を委託しています。)

修道学園(中・高)同窓会事務局
〒730-0055 広島市中区南千田西町8番1号 TEL(082)241-6686(直通) FAX(082)249-0870 E-mail:dosokai@shudo-h.ed.jp